

愛川町立田代小学校

研究テーマ：表現する力を育てる授業づくり

1 実践の目的

本校では平成26年から平成30年度までの5年間、国語科の研究を行ってきており「表現する力の育成～書く活動を通して～」をテーマとし、校内研究に取り組んできた。書く力を育成する授業づくり、そしてその授業で身につけた書く力を他教科で応用するという目標をもって研究を進めた。そして、平成31年度・令和元年度より、算数科を研究科目とし、主題を「表現する力を育てる算数科の授業づくり」と設定し、算数科の中での表現する力に絞って4年間研究を進めてきた。

今年度のテーマは「表現する力を育てる授業づくり」である。今までの取り組みを継承しつつ、書くこと以外の表現する力、表現力を育成するには土台となる学級経営が大切であることなどを踏まえ、さらに範囲を広げて全教科全領域とし、今年で研究2年目となる。書く力だけではない表現する力を様々な場面で育成すること、そのための学級経営、表現しやすいクラスの雰囲気づくり、児童に見通しを持たせた授業づくりなどに焦点を当て、全学年で共通理解を図りながら研究を進めている。

2 実践の内容

本校は各学年1学級編成の小規模校である。

現状、各学年20名程度の単級で、基本的に児童同士の関係性が変化しない。それに加えて教員の目もかなり行き届くことと、協力的な保護者がいることで、児童が自分から発信しなくても通じ合える、わかってもらえる場面が多くなる。悪いことではないが、今求

められる「協働的な学び」においても、個々の主体性が生きていく学習を進めていく必要がある。

本校の現状を生かしながら研究を充実するために、次の点を共通理解し、研究主題に迫っていこうと考えた。

(1) 授業研究を基本に

全学級で授業公開を基本とした。昨年度より全教科全領域での取り組みということで、各教員が児童の実態やそれぞれの個性や持ち味を生かし、様々な教科で授業公開を行っている。その中で授業の質を高め、テーマについての共通理解や子どもの学ぶ姿から児童理解を深めている。

(2) 児童インタビューについて



今年度から児童インタビューを取り入れた。(インタビューの形式は授業後に5分間で自席待機する児童に対して参観者が授業に関する質問をする形式で行う) 目的は、児童が授業の中で感じたことを知ることで授業改善につなげ、児童にとっても教員にとってもより良い授業にしていけるためである。児童全員がインタビューに参加することで、児童にとっての授業の振り返りにもなると考えている。

(3) 研究協議の充実



授業公開後の研究協議では、付箋紙を用いたグループ協議の形式を取り入れている。授業を参観しての様々な気づきを、協議の柱を絞って話し合い、共有する中で、授業を見つめ直し、テーマについて深める機会としている。グループ協議後は各グループでまとめた模造紙をお互いに見合い、質問も交えながら全体で共有し、全職員が学んだことを次の授業に生かせるようにしている。

(4) 学習指導案・学びのプラン

学びのプラン「スイミー」

なまえ ()

ことばのつかい方	かんがえ方	とくを しせい
・あたらしくなった 言葉を つかう	・どうしようぶつや ぼめのん ようすを そうそうする	・ねほりよく かんばる ・しぶんの すきなぼめんを つた えようとする

◎「スイミー」の学しゅうで、学ぶこと

	めあて	ふりかえり ◎ ○ △
1	お話の すきなところを ともちろに 話そう。	
2	ぼめのん の まとまりを たしかめて 音読しよう。	
3	1. 2. ぼめのん の 出さくを たしかめよう。	

学習の流れ、単元の見通しを持てていなければ表現する活動にも前向きには取り組めない。そこで、昨年度から校内研究の講師として招聘している白梅学園大学教授の三藤敏樹先生から紹介していただいた「学びのプラン」を活用している。児童に単元の流れを示したもので、この単元で身につける力、各時間で行うことやめあて、そしてふり返りを書くスペースをまとめたものを児童に配付している。

それを受けて、学習指導案も単元計画をメインとしてコンパクトな形で書く形式を取り入れた。児童だけでなく教師もその単元を見通し、児童につけたい力をしっかりと押さえることができる。その上で、表現させたい場面やタイミング、意図を改めて考えるようにしている。

3 実践の成果と課題

(1) 成果

- 「学びのプラン」の活用を通して、児童にも教師にも見通しを持った学習づくりを意識するようになった。
- 児童インタビューを行うことで児童の声を直接取り入れることができた。

(2) 課題

- 「表現力」の捉え方が人によって違った。
- 成果の積み重ねが見えにくい。焦点化していく必要があった。

4 今後の展開

(1) 今後の研究の方向性

2年間「表現力」をテーマにした研究を行ってきたが、教員一人ひとりの「表現力」の捉え方が違うことから、来年度の方向性を見直す必要がある。

(2) 課題への対応

- 「表現力」の継続が本校の児童に適切かどうかを検討する。
- 本校の児童の実態に合わせた研究にするには柔軟性を持たせた研究を行う必要がある。
- 抽象的な点については焦点を絞って全員が目指す児童像をイメージしやすする。